

研究論文

幼児期における他者の利己的な欺きの意図の理解

多田 幸子 ・ 尾池 晴香*

Young Children's Understanding of Other's Selfish Deception

Yukiko TADA, Haruka OIKE*

【要約】

4歳30名, 5歳32名, 大学生53名に, 同じ玩具を欲しがると兄弟二人のうち, “弟は自分をよくまねる”と
思っている兄が, 物語終盤で別の玩具を選ぶかのような発言をしたとき, その発言の意図をどう考える
か尋ねた。その結果, 物語の内容を正確に把握している者の中で, 兄の発言に, 弟の行動を誘導して自
分の欲しい玩具を手に入れようとする利己的な欺きの意図を疑う者は4歳ではおらず, 5歳は1名, 大学
生でも7名にとどまった。

【キーワード】

幼児期, 他者の意図の理解, 利己的な欺き

目的

私たちは, 会話をするときには, 話者の置かれ
ている状況などのさまざまな周辺情報をもとに,
外から見えない本心を推測しながら, 相手のこと
ばに耳を傾ける。これは, ひとが話す内容はとき
として事実と異なっていたり, 話者の心的状態を
反映していなかったりするためである。誰かの発
言の背後にどういった意図があるのかを正確に推
しはかることができれば, より円滑なコミュニケ
ーションが期待でき, また, 余計なトラブルの回
避も可能な場合がある。

ひとが対他的に表出するものと心的状態との不
一致の理解は, 幼児期に始まり, 児童期以降でさ
らに深まっていく。感情を例にとれば, 「見かけ」
と「本当」の違いは, 幼児期後期に, 発達初期の
感情調整の経験, 社会化, 認知発達等の様々な要
因に支えられて発達し (溝川, 2011), 年長児は感
情の見かけと本当が異なることに関する理由をよ
り多く, また正しく生成する (Harris, Donnelly,
Cuz, & Pitt-Watson, 1986)。

他者の発言に対する見かけか本当かの区別にあ

たって重要なのは, そこに欺きの意図を読み取れる
かどうかであろう。欺きは, 事実と異なる情報を伝
えるという行為であり, 欺く相手が存在するような
社会的文脈における欺きでは, とりわけ, 自分の利
益のために誤情報与える“戦略的なだまし” (箱田・
仁平, 2006) に注意が必要である。この戦略的だま
しも含めた欺瞞を見抜く手がかりに関する研究を
概観すると, 明示的でないものも込み優に100を超
える手がかりがあるという (Depaulo, Lindsey,
Malone, Muhlendruck, Chalton, & Cooper, 2003)。

では, こどもはいつごろから, 他者の欺きの意
図に気づくのか。欺きという行為やうそに対する
こどもの認識の形成は, 古くは, 道徳判断の発達
に関する一連の研究で検討されてきた
(Piaget, 1932/1957)。しかし, こども自身が相手
のうそを見抜けるかどうかを調べた研究は数も少
なく, まだ分からないことが多い (松井, 2015)。
しかし, 3歳以上こどもは, 自信のない口調の話者
が言うことを信頼しないという報告がなされてい
るなど (Matsui, Yamamoto, & McCagg, 2006),
発達早期のこどもであっても, 他者による戦略的

*港区しばうら保育園分園

なだましの要素である利己的な欺きの意図に対して、手がかりをもとに気づきを示しうるのはないか。

特に、幼児になじみのある日常生活の一場面を主題とする物語の中で、登場人物の一人に、別の誰かを欺くための動機があり、かつその誰かの行動特性に関する知識があるという手がかりが明示されているとき、幼児は手がかりを用いて登場人物に利己的な欺きの意図を見出す可能性がある。そこで、本研究では、幼児と大学生を対象に、架空の物語の中で、5歳の兄と、兄からは自分の言動をよくまねると思われている3歳の弟が同じ玩具を欲しがすが、終盤で兄が別の玩具を選ぶかのような発言をする様子を呈示し、兄の発言にはどのような意図が推察しうるかを尋ねることとした。各年齢段階の回答を分類整理することによって、幼児期における戦略的なだましへとつながる利己的な欺きの意図がどの程度推察されるのかを明らかにし、他者理解に必要な認知的機能の発達に関する知見を得ることを目的とした。

戦略的なだましは、欺かれた他者の知識状態、意図がどのように変化するかという理解を踏まえて、他者に事実と異なることを信じさせる必要がある（横田・田中，2012）。ここには4歳時期に獲得される心の理論の関与が想定されるため、本研究では、幼児の場合、4歳以上の二つの年齢段階（4歳，5歳）を対象とした。

方法

参加者 A市の保育施設に在籍する幼児62名、すなわち4歳群30名（平均4歳2ヶ月）、5歳群32名（平均5歳1ヶ月）、A市の大学に在籍する学生53名（平均21歳0ヶ月）が参加した。

時間と場所 幼児の場合は20XX年10-11月に保育施設内の、落ち着いて課題に取り組める一角を借り、机一台と机をはさんで向かい合った椅子のうち一脚に座って課題に臨んだ。大学生の場合は20XX年11月に大学の空き教室で、黒板側を向く既設の個別机と椅子にそれぞれ着席した状態で課題に臨んだ。

材料 縦30cm×横42cmの長方形の画用紙を横方

向で用い、Figure 1のように物語の各場面を描画した。全7枚は、調査者の読み上げる内容に対応して一枚ずつ、紙芝居の絵カードの要領で参加者の前面に掲示された。また、問5の回答のための3つの選択肢ひとつずつをひらがなで記したカードを作成した。全3枚は調査者の読み上げるそれぞれの選択肢に応じて、参加者の前面に掲示された。

課題 瀬野（2008）を元に、兄と弟が赤いミニカーを欲しがすが、最後に兄が青いミニカーを選ぼうとするかのような発言をするという物語を作成した。物語冒頭で、兄は、弟が頻繁に自分のまねをすることを知っていると明示された。

また、物語に関わる次の5つの質問を作成した。それらは、問1：兄が最初に欲しがったミニカーの色を尋ねる問い、問2：兄が選びなおすことを仄めかしたミニカーの色を尋ねる問い、問3：兄が選びなおそうとするような発言をした理由を尋ねる問い、問4：兄が本当に欲しいミニカーの色を尋ねる問い、問5：兄が知っている弟の行動面での特徴を尋ねる問いであった。問5では、4つの選択肢をひらがなで書いたカードを掲げ、調査者が一つ一つを指さしながら読み上げたのち、参加者に回答として最もふさわしいものを指さしや口頭で示すようを促した。選択肢の呈示順は偏りが無いよう参加者間で調整した。

問1と問2は物語の流れを理解し記憶しているかどうかを確認するための質問、問3は最後の兄の発言に対して推察される意図を尋ねる質問、問4は戦略的なだましの動機になりうる兄の心的状態（真の要求であり本心）の理解を確認する質問、問5は兄が弟の行動を操作するにあたって利用できる知識であり、戦略的なだましの要素である利己的な意図に気づく情報を記憶しているか確かめる質問であった。

手続き 幼児の場合は個別で調査を実施した。まず、趣旨を分かりやすい表現で説明し、参加の意思確認を経てから、上述の物語を7枚の紙芝居で呈示した（Figure 1）。その後、先述した5つの質問をし、参加者の回答は筆記で記録した。

大学生の場合は集団で調査を実施した。はじめに調査の趣旨を説明し、参加の意思確認を経てか

ら、上述の物語課題に関する質問への回答用紙を配布した。物語と質問は調査者が口頭で読み上げ、物語呈示後の各問の回答には十分な時間を取り、全参加者の記入が終了したことを確認して次の質問に移った。問5は幼児の場合と同様の3つの選択肢を呈示し、その中から最も適切と思われるものを用紙に記入し回答するよう求めた。所要時間は幼児・大学生とも15分程度であった。

結果

兄の真の要求の理解 問1で兄がはじめに欲しかったミニカーの色を赤（正答）、問2で最後に兄が選ぼうとしたミニカーの色を青（正答）と回答したものの割合をまとめた。該当者は、4歳児が20名（30名中の67%）で有意に少なく、5歳児は26名（32名中の81%）、大学生が50名（53名中の90%）で有意に多かった（ $\chi^2_{(2)}=10.80, p<.01$ ）。

さらに、問1、2で正解し、問4で兄が本当に欲しいミニカーの色を赤（正答）と答えた者の割合を

まとめた。問1、2、4の正解者は4歳児が11名（30名中の37%）と有意に少なく、5歳児は20名（32名中の63%）、大学生が45名（53名中の85%）と有意に多かった（ $\chi^2_{(2)}=20.14, p<.01$ ）。

加えて、問1、2に正答した者で問4に青と答えた者は、4歳児8名（30名中27%）、5歳児5名（32名中17%）、大学生4名（53名中8%）であった。

兄の最後の発言に対する意図 問1、2に正答し、問4で赤と回答した者が推察する兄の発言の意図を整理した（Figure 2）。Figure 2より、自分が欲しいミニカーを手に入れるようとする欺きの意図に言及した者は4歳ではおらず、5歳児で1名、大学生で7名であった。

また、Figure 2より、各年齢群で最多の回答は、4歳児では発言の意図が「分からない」、5歳児と大学生では利他的意図でもって「弟に譲るため」であった。この利他的意図に言及する回答は、他の回答に比して4歳児で有意に少なく、大学生で有意に多かった（ $\chi^2_{(2)}=19.50, p<.01$ ）。

兄が捉える弟の行動特徴の理解 問5単独でみたとき、弟に対する兄の理解として、自分のまねをよくすると思っていると回答した者は、4歳児が12名（30名中の40%）と有意に少なく、5歳児は19名（32名中の59%）、大学生が49名（53名中の92%）と有意に多かった（ $\chi^2_{(2)}=27.07, p<.01$ ）。

次に、問1、2に正答し、問4で赤と答え、問5で兄は弟が頻繁に自分の真似をすることを知っていると回答した者の割合をまとめた。該当者は4歳児が5名（30名中の17%）と有意に少なく、5歳児は15名（32名中の47%）、大学生が42名（53名中の79%）と有意に多かった（ $\chi^2_{(2)}=31.08, p<.01$ ）であった。

頁	内容	呈示した絵
1	5歳のお兄ちゃんのサトシくん、3歳の弟のイサムくんがいます。イサムくんはよくお兄ちゃんのまねをします。サトシくんは「イサムくんはいつも僕のまねをするな」と思っています。ある日、お母さんが二人に、「旅行に行くけどお土産はなにがほしい?」と聞きました。	
2	お兄ちゃんのサトシくんは、「僕は赤いミニカーがほしい」と言いました。	
3	弟のイサムくんは、「僕も赤いミニカーがほしい」と言いました。お母さんが旅行から帰ってきました。買ってきたのは、	
4	赤いミニカーひとつと、青いミニカーひとつです。二人でどちらか選ばなければいけません。	
5	お兄ちゃんのサトシくんが、「僕は赤いミニカーがほしい。」と、赤を選びました。	
6	弟のイサムくんは、「僕も赤いミニカーがほしい」と、二人とも赤を選びました。すると、お兄ちゃんのサトシくんが、	
7	「じゃあ僕は、青いミニカーにしようかな」と言いました。	

Figure1 紙芝居の各場面

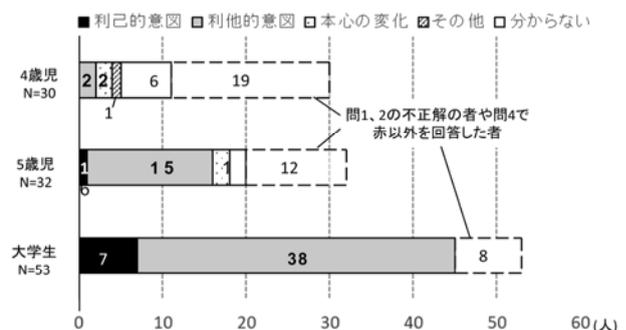


Figure2 問1、2で正解しかつ問4で兄が本当に欲しいミニカーの色は赤と回答した参加者が推察する物語終盤での兄の発言の意図

考察

本研究では、幼児期における、戦略的なだましの要素である利己的な欺きの意図の理解について、架空の物語に登場する人物の心的状態を読み解く課題を用いて調べた。調査の結果から、物語中で最初に兄が欲しがったミニカーの色（赤）と最後に選ぶことを仄めかした色（青）を正しく答えられる割合は、4歳児では、他群に比べて低く、本当に兄が欲しいと思っているミニカーの色を赤と答えた者の割合はさらに限られ、4歳参加者全体の約三分の一程度であった。また、物語の初めと最後に兄が欲しいと言ったミニカーの色を正しく記憶していた者の中には、兄が本当に欲しい色のミニカーを青と答える者が8名おり、4歳児では3割近い参加者が兄の発言は偽らざる本心と考えていた。

この結果は、他者の感情の理解に関する先行研究で4歳児が、見かけと本当を意識的に区別せず、差異がないと判断すること（Harris et al, 1986）と無関連ではないだろう。4歳児は、他者の発言の表面的な意味を理解しても、発言内容と話者の心的状態（真の要求）との不一致がある可能性を考慮することはまだ容易ではないといえる。

5歳児の場合は、最初に兄が欲しがったミニカーの色（赤）と最後に選ぶことを仄めかした色（青）を正しく答えられた者は8割を占め、さらに兄が欲しいと思っているミニカーの色を赤と答えた者の割合は5歳参加者全体から見ると約三分の二を占めた。また、物語の初めと最後に兄が欲しがったミニカーの色は正しく答えられたが、兄が本当に欲しい色のミニカーを青と答える者は2割未満にとどまり、他者の発言内容が真の要求と一致しない場合があることに気づき、他者に心的状態があることを理解するものが増えると分かる。

こういった幼児群に対して、大学生は、物語の最後に違う色のミニカーを選ぶことを仄めかすような発言をしていても、本当に欲しいのは赤のミニカーであると答える者が8割以上であった。このことから、成人するころには、多くの者が他者の発言を読解する際に、心的状態の表出が調整されている可能性を考えるようになることを示すと考えられる。

では、各年齢群は、物語の中の兄の最後の発言の意図についてはどのように解釈したのか。結果より、4歳児は、兄が本心では赤いミニカーが欲しいと思いつつ青いミニカーを選択するような発言をした意図を説明できない者が半数を超えた。このことは、他者の感情表出の調整に対する理解を調べた研究で報告された、調整の理由を述べられない4歳児の姿と重なる部分がある（Harris et al, 1986; 溝川, 2007）。そのような4歳児群に対して、5歳児と大学生は、本心と異なる青いミニカーを選択することを仄めかす兄の発言の背後に弟の要求を優先するための利他的な意図を読み取っており、その割合は5歳児で7割、大学生では8割以上であった。

一方で、青いミニカーを選ぶかのような兄の発言に最終的に赤いミニカーを手に入れるための利己的な欺きの意図を推察した者は、4歳児ではおらず、5歳児では1名で1割未満、大学生でも7名と2割に満たなかった。本調査で用いた物語の冒頭では、兄が弟は自分のまねをよくすると考えていることが示されていた。この、欲しい玩具を取り合っている弟の行動傾向に関する兄の知識を手がかりとすると、参加者には、自分は青色のミニカーを選びなおすと見せかけることで、弟の注意を青いミニカーに向け、再選択を暗に促すよう試みる、つまり兄は自分が欲しい赤いミニカーを入手するために、真の要求に沿わない発言をした可能性を疑うことができると考えられた。しかし、各群の参加者は兄の発言を戦略的なだましと捉えることはまれであった。

そこで、そもそも参加者が、兄は“弟が自分のまねをよくする”と思っている点をどの程度、把握していたかを確認すると、問5単独で見た正解者は、4歳児で30名中12名、5歳児で32名中19名、大学生で53名中49名であった。さらに、問1, 2に正答し、問4で兄が本当に欲しいのは赤いミニカーであると答えた者のうちで、兄が弟に対して思っていることについても正しく答えられた者に目を向けると、4歳児5名、5歳児15名、大学生42名であり、大学生に対する4・5歳児では該当する割合が小さかったといえよう。問5の回答は、直前に提示され

た物語の中に出てきた情報と一致する選択肢を選ぶ再認型で、自由再生型よりも手がかりがある分、正答しやすくと考えられるが、実際には問5単独の正解者は5歳児で6割に満たなかった。このことから、問5で尋ねた物語中の呈示情報への理解のレベルが、問1, 2に関しての理解のレベルと異なっていた可能性がうかがわれた。

兄が弟の行動特徴に関する知識を持っていると理解するには、他者の一次の信念に関する理解が求められる。これは、“ある人がXと思っている”と分かることであり、予期せぬ移動課題を用いた調査では4-5歳で可能になるとされ (Wimmer & Perner, 1983), その他の類似課題を用いた多くの調査結果をメタ分析すると課題通過の統計的な確率は4歳頃に高まる (郷式, 2018)。本調査の幼児群は、この、他者の一次の信念に対する理解が一定水準以上に期待できる年齢段階にあった。しかし、本調査で用いた物語中で、“兄が‘弟は自分の言動をよくまねる’”と理解するには、入れ子構造になった命題を理解する必要があった。つまり、「ある命題を含む命題について考えるという階層的・再帰的思考」が求められ (郷式, 2018), その困難さが、兄が弟に関して思っていることについての短期記憶化を妨害し、問5の通過率の低さに至った可能性がある。

この場合、兄が持っている弟に関する知識という情報は、年少の幼児には、兄の発言の意図を推しはかる手がかりとみなし難かったといえよう。複雑な思考過程を必要とせず、より幼い子どもも注目できる情報を手がかりとして呈示したとき、4-5歳児が他者の発言にどの程度、戦略的なだましへとつながる利己的な欺きの意図を推察するのか、改めて検討する必要がある。その際には、兄の、弟に対する態度や性格を推測の手がかりとして明示することが考えられる。これらは幼児期に理解が深まる善悪の概念と関連する手がかりであり、特に「意地悪」であるとか「悪人」であるといった反社会的な特性は、4歳児にもそれが付与された他者への疑念を喚起することが示唆されている (松井, 2015)。

こういった幼児群に対して、大学生の約9割は、

質問への回答から、“兄が‘弟は自分の言動をよくまねる’”と理解していることを分かっており、その情報を短期記憶にとどめていた。それに加えて、兄が物語の終盤で選ぼうとしたミニカーは本当に欲しい色のミニカーではないと理解している者は約8割に上った。これらの点から、大学生の大半が、物語の終盤における兄の発言を、弟が自分の言動をよくまねると思っているので、自分が青いミニカーを選ぶことにより、弟の関心を青いミニカーに誘導し、最終的には自分が欲しい赤いミニカーを手に入れようとしていると解釈することも起り得た。しかしながら、大学生では、兄の心的状況を理解しながらも、物語終盤での発言の意図は利己的な欺きの意図によるというより、弟に赤いミニカーを譲ろうとする利他的意図によると考える者が38名と全体の約7割に上った。

この利他的意図を推察する回答を、幼児の場合で確認すると、4歳児で2名、5歳児では15名であり、大学生に比べればその割合は大きくはないものの、どの年齢群においてもみとめられることとなった。また、利己的な欺きの意図よりも、弟の希望を優先しようとする利他的意図の方が、年齢を重ねるごとに回答される増加する割合が大きいようであった。この利他的意図への推察の偏りは、参加者におけるきょうだいというものに関する経験や知識によって影響を受けた可能性がある。

われわれは他者の行動を、その個人の心的な状態だけではなく、その個人が守らなければならないと思っている社会規範や義務などの道徳観念についての経験や知識の量、またそれらの内容をふまえて理由づけようとする (東山, 2018)。参加者が本調査の課題において焦点を当てるよう促された「サトシ」は「イサム」の年上のきょうだいという設定であった。日常的な葛藤場面においては、幼少期から年上のきょうだいは年下のきょうだいに譲歩することを求められやすく、譲歩したときには周囲のおとなから肯定的な評価を得ることが多い。

成長とともに、こどもはこういった背景を理解し、また、自身もきょうだいとの生活経験を重ねるなどすると、年上のきょうだいは年下のきょう

だいを優先するよう自然と奨励され、その結果、葛藤場面では年上のきょうだいは年下のきょうだいに譲歩するものという観念が浸透していくと考えられる。年下のきょうだいがいるような場合は、さらに、小学校低学年ごろには、周囲のおとなが年下のきょうだいを優遇することも容認する態度を示すようになる（東山, 2012）。

成人するまでの過程で、誰かの発言の意図はよりいっそう「社会が何をそのひとたちの義務とし、なにを許容しているか」と関連付けて推論されるようになり、相手の置かれた社会的文脈への注目度も増していくと考えられる。きょうだい以外の社会的関係にある人間どうしが葛藤している場面で、幼児期のこどもや大学生は、ある登場人物の発言に、他の登場人物への利己的な欺きの意図をどの程度見出すのかは、新たな調査で明らかにしていくことが今後の課題とされよう。

本研究を通して、幼児期中-後期で、他者の発言が本心に基づくとは限らないことや、発言内容を超える意味が込められている場合があることへの理解が高まっていく様子が確かめられた。また、二者の葛藤場面において一方が口にした本心にそぐわない発言は、他方を戦略的に欺こうとする利己的な意図としてではなく、他方への好意的で利他的な意図として理解される傾向が5歳以降でより明確に見られるようになることが明らかになった。これらの結果は、発達早期の社会的認知をとらえ、幼いこどもの他者理解がどのように進展していくのかを描出するための、さらなる調査の足掛かりになるだろう。

引用文献

- Depaulo, B. M., Lindsey, J. J., Malone, B. E., Muhlenbruck, I., Chalton, K., & Cooper, H. 2003. Cues to deception. *Psychological Bulletin*, 129, 74-118.
- 箱田裕司・仁平義明. 2006. 嘘とだましの心理学: 戦略的だましからあたたかい嘘まで. 東京: 有斐閣.
- Harris, P. L., Donnelly, K., Cuz, G. R., & Pitt-Watson, R. 1986. Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, 57, 895-909.
- 東山 薫. 2012. “心の理論”の再検討: 心の多面性の理解とその発達の関連要因. 東京: 風間書房.
- 東山 薫. 2018. 第20章社会的関係と心の理論発達. 日本心理学会(編)/尾崎康子・森口佑介(責任編集). 社会的認知の発達科学(pp. 265-277). 東京: 新曜社.
- Matsui, T., Yamamoto, T., & McCagg, P. 2006. On the role of language in children's early understanding of others as epistemic beings. *Cognitive development*, 21, 158-173.
- 松井智子. 2015. 子どもの認知発達の指標として「うそ」をとらえる. *心理学ワールド*, 71, 9-12.
- 溝川 藍. 2007. 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解. *発達心理学研究*, 18, 174-184.
- 溝川 藍. 2011. 幼児期における感情表出の調整に関する理解の発達. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 第57号, 503-515.
- Piaget, J. 1957. 大伴 茂(訳). 児童道徳判断の発達. 東京: 同文書院.
(Piaget, J. 1932. *Le jugement moral chez l'enfant*. Geneve: institut J. J. Rousseau.)
- 郷式 徹. 2018. 第13章心の理論. 日本心理学会(編)/尾崎康子・森口佑介(責任編集). 社会的認知の発達科学(pp. 167-180). 東京: 新曜社.
- 瀬野由衣. (2008). 第6章心の理解の発達: 子ども

に心の世界が開けるとき. 加藤義信(編). 資料
でわかる認知発達心理学入門(pp. 88-103). 東
京:ひとなる書房.

横田晋務・田中真理. 2012. 幼児期における欺き
行為の発達. 東北大学大学院教育学研究科研究
年報, 第61集, 第1号, 145-156.

Wimmer, H., & Perner, J. 1983. Beliefs about
beliefs: Representation and constraining
function of wrong beliefs in young
children's understanding of deception.
Cognition, 13, 103-128.

付記

本稿は尾池晴香氏(2016年度山梨県立大学卒業)
の卒業研究をデータを補完したうえで, 加筆修正
したものであり, 第59回日本教育心理学会総会で
尾池氏と連名で発表しました。

謝辞

調査にご協力くださった保育施設のこどもたち,
先生方, 保護者の方々, 学生みなさんに心より
お礼申し上げます。

